

---

# コードギアス 夏の風物詩

月城十夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コードギアス 夏の風物詩

### 【Nコード】

N1994M

### 【作者名】

月城十夜

### 【あらすじ】

STAGE・9〜21ぐらいのシチュエーションで、スザクに二人の同居がバレてます。青春に反逆のルルーシュ。

## 第一話・SCENE LELOUCH

「おはよう、ルルーシュ」

本気で掴んだら、すぐにも折れてしまいそうな細い手足。

まるきり、それを見せ付けるようにして、シャワーを浴びた直後の身体を火照らせながら戻ってきたC・Cは、濡れた髪もそのままに、ゴロリと怠惰にソファに転がった。

いつものようにパソコンデスクに向かって、作戦の準備を進めていたルルーシュは、眉間に濃い縦皺を刻み込むと、無言で嫌そうにC・Cの姿を睨め付けた。

ふああと呑気にアクビを洩らしながら、愛しげに腕の中のチーズくんにチュ、チュツと朝の挨拶をしていたC・Cは、しばらくして、初めて気づいた素振りを装って、ふふつと悪戯な流し目でもくそ笑む。

「何をそんなにジロジロ眺めているんだ、ルルーシュ？」

ルルーシュの視線を意識しながら、C・Cは仰向きの状態から、ゴロリと腹ばいに寝返りを打ちなおすと、クスクス愉しげに笑い声を上げながら、腕の中のチーズくんに頬ずりをして見せている。

遠目に眺めても、ほのかな薔薇色に上気している肢体の至るところが、まだかなりの水滴や汗のしずくで濡れているのがわかってしまふのは、窓から差し込む陽光にキラリと反射したせいだ。

実際の年齢を感じさせない瑞々しさで輝いている玉の素肌は、濡れているせいで余計に透明感を増していて。中でも特にルルーシュの目に馴染みの良い淡いエメラルド・グリーンの髪の美しさが、ひととき實際立っているように感じてしまふ。

たしかに、見た目だけを問題にするならば、極上の部類に入ってしまう美少女なのである。

だが、しかし、見た目などというものが、この女の場合いったい何の問題になるのか？

昼にも近いこの時間に、ようやく寢床から抜け出したばかりだというのに、たわけた女は、それから数分後には、かすかな寢息を洩らし始めていた。

おまえは一体どこまで無精者なんだと、ルルーシユは、しみじみ溜息を吐き出しながら、ベッドの上からタオルケットを取って戻ってくる、ついでに濡れた身体を拭ってやりながら、肩の上まで丁寧にタオルケットを着せかけた。

季節は、夏。

ただでさえ、シャワーを浴びたばかりで暑いのだろう。

そんなことくらい、重々承知している。

だが、しかし。

「…水着だと、まだしもマシなんだがな……」

この、拘束衣のインナーというのは、どうにも……。

いくらルルーシユが、こっちの方面には淡白な気質であるとはいえ、多少は目のやり場に困ってしまう。

むしろ、ルルーシユのシャツを勝手に着ている時のほうがマシだった。

アレなら見た感じ、あんまり身体のラインが協調される心配はない。

しかし、おそらく着脱する際の効率を最優先に考えてあるのだろう、C・Cが普段着にしている拘束衣のインナーは、一部の隙なく女の身体にぴったり張り付いていて。

肉感的な身体の凹凸を、これ以上もなく強調して見せているものだから、タオルケットの上からでも何となく、腰のくびれている感じとか、尻の丸みなどが際立って見えてしまうのだ。

いい加減、年かな、俺も。

昔は、それこそC・Cが、裸同然の格好で目の前を歩き回っていたように、一向に気にする気にもならなかったはずなのに。

最近は、本当に時々ではあるけれど、C・Cを単なる一人の女として意識してしまう場合がある。

いい加減、年だな、俺も。

うんざり溜息まじりに結論をつけると、ルルーシュはタオルを手に取り、濡れたC・Cの髪を拭い始めた。

放っておいても、風邪など引かない体質であるのは、充分以上によく知っている。

しかし、あいにくルルーシュのほうが、放っておけない体質なのだ。

そもそも、このままではソファが濡れてしまう。

我ながら、言い訳がましいセリフを内心で呟きながら、やってみれば結構楽しい作業に専念していると、しばらくしてコンコンとドアをノックする音が聞こえた。

一瞬、このまま居留守を使ってやろうかと考えたが、そんなふうに感じた自分のほうに驚きを感じた。

どうして俺が、居留守を使ってまで、C・Cの髪を拭いてやらなくてはいけない？

どうやら気づかぬところで、相当魔女の毒牙に感化されているらしいな　と、うんざりしながら肩をすくめると、ルルーシュは洪

々腰を上げた。

だが、その場からまだ一步も動き出さないうちから、勝手にドアが開けられたから驚いた。

「　　Ｃ・Ｃ、居る？　あ、寝てる」

「スザクツ！　おまえはまた……返事をするまで入ってくるなとツ！　いや、それより今は、入ってくるなツ！」

「どうしてさ？　あ、ひよっとして、ゴメン。お取り込み中だった？」

「バカかツ！　そういうことではなくってだなツ！」

「　　…う、うんツ…もっ……るさア…い…っ」

寝ている頭の上で喧々囂々とやり合っているものだから、不機嫌そうに唸り声を上げたＣ・Ｃが、ゴロリと寝苦しそうに寝返りを打つ。

ルルーシユがハツとした時には既に遅く、身体中に濡れた髪を色っぽく纏い付かせながら仰臥しているＣ・Ｃが、腹の下までタオルケットを蹴落としてしまっていた。

この女は、またっつ！！

ルルーシユも今まで気づいてなかったのだが、チューブトップのバストの部分を、涼むのが目的でしっかり上まで引き上げてないものだから、胸の谷間どころか、淡いピンクの乳首の輪郭が危ういところで覗いてしまいそうになっている。

そんなものを、男の居る部屋で平気で見せ付けるな！　とルルーシユは慌ててタオルケットを鷲掴むと、Ｃ・Ｃの肩口を巻き込むようにして強引に着せかけた。

「　　…ねえ、それって暑いんじゃないのかなア？」

「うるさいっ。黙れっ！」

おまえは、いったい何を残念そうに言っているのかと、思わずルルーシユが赤面しながら食ってかかると、よりもよってこの無粋

な親友は、C・Cの枕元にしゃがみ込んでくるなり、しみじみ寝顔を眺めた後で、ボソリと呟いた。

「こうしてみると、本当に『普通の女の子』なんだよねえ……」

普通の女だからといって、どうしてそんなにジロジロ眺める必要があるんだ？ とルルーシュは激しくムツとしながら、そのままそそくさと腰を上げた。

「行くぞ、スザク。用があるから、呼びに来たんだらう？」

「うん、まア、それは、そうなんだけど……ね」

すっかりC・Cの寝顔に興味を抱いている様子で、一向に腰を上げようとしなないものだから、ルルーシュは更に激しく激昂した。

「デリカシーのない男だなッ、あんまりジロジロ眺めるなッ！」

スザクは、あてつけがましく大きく息を吐き出すと、クルリと振り向き、半眼になって訊ねてくる。

「デリカシーのない男だね、自分だってジロジロ眺め回していたクセに？」

「ッば……誰がッ！」

「ま、別にどっちでもいいけどね。それにしても彼女、どうしてきみの前だと、こつても無防備なんだろう？」

「知らんッ！」

いいから、早くコツチに来い！ と苛立たしげに大きな仕草で催促すると、しぶしぶルルーシュの隣に肩を並べてきたスザクが、チラリと横目でルルーシュの反応を愉しむように目を細めた。

「それともルルーシュって、案外、男として見られてなかったりする？」

「……………はあ？」

一瞬ルルーシュは、なぜだか意識の片隅で、枢木神社の境内で騒々しく鳴き騒いでいるセミの合唱を、リアルに聞いたような錯覚に陥った。

スザクはそんなルルーシュを眺めながら、なにやら納得した顔つきで頷くと、なぜだか露骨に慰めている仕草でポンポンとルルーシ

ユの肩を叩いて、言った。

「この夏の間、長年の宿題が片付けられるといいね、ルルーシュ？」

「それは一体、どういう意味だ？」

「言葉通りの意味だけど？」

言うだけ言つて、満足したのだろう。

既に話に興味を失くしているスザクは、スタスタとドアに向かって歩みを進めた。

「おい、スザク！」

肝心の用件を、まだ伝えてないだろう！ とルルーシュが引き止めると、「ああ、そうそう」と思い出したように呟きながら、スザクが何食わぬ顔つきで振り向いた。

「C・C. が起きたら伝えてくれる？ 頼まれてたピザ、届いてるから」

じゃあね、とニッコリ微笑むと、スザクはさっさと部屋から出て行った。

そんなもの、別に部屋に入ってくるまでもなく、済んでしまふ用件だろう？ とか、

言葉通りの意味って、どういう意味なんだ？ とか、

どうして俺が、C・C. に異性を意識される必要があるんだ

？ とか、

そもそも俺が、どうしておまえに慰められなければならない？ とか、

ルルーシュは目まぐるしく数多のことを同時に考えながら、なぜだか頭の片隅でワンワン鳴くセミの合唱を聴いていた。

第二話・SCENE C・C・

「…んツ、…ツんんう〜?」

信じられないほどの、暑苦しさ。

いったいコレは、何の冗談なんだ？

C・C・は、眠い目をこすりながら茫然と思った。

てつきり身体の上に、誰かが押し掛かっているのだとばかり勘違いしてしまったのだ。

なんだかヤケに恨めしそうな顔つきで睨まれていた記憶があったから、とうとうルルーシュの奴め、理性の鎖がぶち切れてしまったのだなど、意地の悪い気分を考えて。

まア、こんなに魅力的な女性が相手では、仕方のない話だよなア、フフフツ。と決して悪くない気分で目を開けた瞬間に、視界に飛び込んできたのが身体の上でこんもり小山を築いている毛布の山だった。

しかも単純に、重ねているだけではない。

一体どこから調達してきたのか知らないが、ザツと数えただけでも20枚もの毛布が、完全にミノムシ状態で全身にグルグル巻きつけてあったのだ。

さすがは、腹の底から真剣に、世界征服を企む男のやることである。

いったん行動を起こすとなったら、やることが半端ではない。

卓越している。際立っている。とてものこと常人には考え付かない、並外れたドス黒さ。

なんて、今は呑気に感心している場合じゃア、ないッ！

「…ッおい！ ルルーシュっ！！ これは一体何の冗談だッ？  
」

なにしろ、あんまり毛布が重すぎて、C・Cの華奢な身体では、微動だに出来ないような状態なんである。

自力で毛布の中から抜け出そうと思ったら、ソファの上からゴロリと一回転して、床の上に転がり落ちるしかない。

最悪の場合は、そうした手段も辞さない覚悟は芽生えつつあったのだが。

まずは諸悪の権化に、ひとこと弁明なり、詫びなり聞かせてもらわないことには、とてものこと腹の虫が治まりそうになかった。

「…ッおい、こらっルルーシュっ！！ 聞こえているのだからッ？！ まさか、この期に及んで、出かけてしまったとか馬鹿な冗談は止めにしてくれよ？ おい、ルルーシュっ！ ルルーシュっ！！」

今まで一度たりとも、こんなに情熱的に、名前を呼んでやったことなど無い。

20回ほど大絶叫のヴォリュームで連呼してやったところで、ようやくルルーシュが、扉の向こう側からのっそり姿を現した。

「やかましい女だな。そんなに大声で叫ばなくても、聞こえている」  
「…ッぶざけるなっっっ！！ いいから早く、この毛布をどけるっっっ！！」

「フン、口ほどにも無い奴だな。たったそれくらいの重石で、身動きが取れなくなってしまうのか？」

「…ッなんだと？」

だったら、おまえが変わりに下敷きになってみるッ！ と怒鳴り

つけてやるつもりだったが。

ルルーシュは無表情に毛布を鷲掴むと、二、三枚だけ残して、残りは一気にベロリと剥いでしまった。

一瞬のことに、C・Cは思わず啞然と返す言葉を失った。

この男、こんなに怪力だったか？

一枚あたり2.5キロとしても、単純計算で40キロ以上の毛布を一気に剥ぎ取ってくれたわけだ。

しかも、ルルーシュは、一体何を考えているのか知らないが、無表情のまま身体の上に押し掛かっていると、C・Cの顔の横に頬杖をつき、至近距離からC・Cの表情を見下ろした。

いつものように皮肉に、高飛車に、人の悪い顔つきで笑っていたのなら、まだしも話はわかる。

だが、しかし

「……………ルルーシュ？」

「なんだ？」

「……………おまえ、いったい何をそんなに怒ってるんだ？」

なんとなく、さっきまでの勢いを失くして怪訝そうに問いかけると、ルルーシュは無表情の仮面を貼り付けたまま、フツツと鼻の先でせせら笑った。

「おまえの眼には、怒っているように見えるのか？ よしんば怒っているのが事実として、何か心当たりでもあるのかと、逆に訊ね返したい気分だがな」

心当たりが全くないと言えば嘘になる。

なにしろ自分は、ルルーシュを地獄に導く魔女だからだ。

性悪な魔女めッ！ おまえなど、死んでしまったほうが世のためだッ！

怨嗟の声。

過去の契約者たちが、くりかえし叫び続けてきた恨みの数々。そこに共通して現れていた憎しみの感情は、今のルルーシュには、まだどこにも見当たらない。

視線を外すのは、まばたきをする一瞬だけ。

あくまで淡々と静かな眼差しを注いでいたルルーシュは、そのまま無言で顔の上に屈み込んできた。

おいおいおい。

吐息が触れるような至近距離から、アメジスト紫水晶色の瞳と、金の瞳が視線を絡める。

触れられると、何だかひどく心地好い大きな手のひら。

爪の先まで綺麗な男だ。

愛するナナリーを守ってやるために、安心して過ごせる世界が欲しくてたまらなくて。

自らの願いと、復讐を同時に実現するために、数多の血潮で血塗られているにもかかわらず、それでもまだ、本当の意味では極悪非道に徹し切れない不憫な私の共犯者。

その美しい指先で、C・C・の前髪や頬の辺りを撫でさすっていたルルーシュは、しばらくして、C・C・の瞳を覗き込むようにして斜めに顔を傾けると、肉付きの薄いその唇をゆっくりC・C・の唇の上に押し付けた。

C・C・は、ひどく落ち着き払っている気分不思議に思う。

この男は、一体何の必要があつて、この行為に及んでいるのか？

おまえが必要としているのは、ナナリーのために用意されるべき世界のはずだろうか？

おまえが知らないだけで、今この瞬間にさえ、汚い手段でおまえさえも裏切り続けている非道な魔女などに、構っている暇など皆無のはずだ。

少なくとも私は、おまえにそのような感情など求めていない。  
だからＣ・Ｃは、ルルーシュが顔を離れた瞬間に訊ねた。

「ルルーシュ、私はおまえの何だ？」

「共犯者だろ？　　口を開ける」

論理の展開がムチャクチャだ。

いつそ殴り飛ばしてやるうかと思っただが、夕子の悪いことにルルーシュは、残りの毛布と自分の体重でＣ・Ｃの自由を巧みに奪っているものだから、Ｃ・Ｃには逃げる余地が残されていないかった。それどころか、冷たい口調で「さつさとしろ」と促がすものだから、思い切りムツとしたＣ・Ｃは、『好きにすれば良いだろう？』と、なかばヤケっぱちで、歯医者に見せる時のようにわざと大きく口を開いた。

ルルーシュは、何食わぬ顔つきでその上に唇を重ねてきて。たがいに半眼で睨み合ったまま、クチュリと舌を絡めて舐められた。

しばらく興味深げにクチュクチュとＣ・Ｃの口腔内を探っていたルルーシュは、やがて銀の糸を光らせながら唇を離すと、濡れてしまった自分の唇をペロリと舐めた。

「フン……思っただほどでもないんだな」

「喧嘩を売っているのか？」

「つもりは無い」

淡々と答えたルルーシュは、残っていた毛布の上の部分で、Ｃ・Ｃの腹の下まで引き下げると、その状態で首筋に顔を埋めてきた。ちくりと刺すような痛みを感じて、頸動脈の上付近にキスマークを残されてしまったのを感じる。

そのまま鎖骨の上まで唇で触れたまま辿って行ったルルーシュは、唇で甘噛みしながらカシリとＣ・Ｃの鎖骨に噛みついた。

傍らでは、チューブトップのバストの部分を、下乳のあたりまで遠慮なくグイッと引き下し、たふたふとその弾力を確かめるようにして、片方の手のひらで包み込んできた。

この展開には、さすがにＣ・Ｃも困惑し始めていたのだが、こ

こまでされても動揺する気になれないのは、ルルーシュの瞳が完全に落ち着き払っているのを目で見ても確かめているせいだ。

何のつもりか知らないが、なにやら頭の中で事前筋書きを用意していて、淡々とその段取りに従って行動に移しているだけの感じさえしている。

唇で肌の上に触れたまま、身体を中心に向かって降りて行ったルルーシュは、胸の谷間の中央に少し強めに唇を押し当てると、チュツと小さく音を立てながらキスマークを残した。

案外、簡単に残るものなんだな？ と、目が口ほどに物を言う。

おそらく感心したのだろう。ルルーシュは、左右の下乳の部分にも同じ行為を繰り返すと、フンと小さく鼻を鳴らして、つまらなさそうにも見えてしまう表情で顔を上げた。

「だからといって、男女の関係になったら悪いという法でもあるのか？」

「は？」

話の前後がわからずに眉間に皺を刻むと、ルルーシュは、めくっていた毛布を一枚だけ引き上げて、C・Cの肩の上まで丁寧に着せ掛けた。

それきり、そっけなく踵を返したルルーシュは、ドアに向かって歩くついでに話を続けた。

「そこらに居る、普通の恋人同士でもやってることじゃないか。共犯者だからといって、遠慮する必要もあるまい？ それとも、おまえには何か不都合でもあるのか？」

C・Cは、ますます眉間に皺を刻み込みながら、唸るような低音で答えた。

「不都合だらけだ。悪いが私は、その必要を感じない」

「なら、相手が俺以外なら？」

「相手の問題じゃない。単純に、その必要を感じていないんだ」

「つれない女だな。せっかく抱いてやろうと言っているのに」

「ふざけるな。童貞を捨てたいなら、街に行つて女でも買え」

「お断りだ。どうして俺が、金まで払つて女を抱く必要があるんだ？」

興味もない女を抱く暇があるなら、ひとりで情眠でもむさぼつていたほうが、よっぽど癒される。そう言つて、ルルーシユは淡々と部屋から出て行つた。

しばらく茫然とその背中を見送つていたC・Cは、ヘアと溜息まじりに身体を起こすと、気だるく寝乱れた髪をかき上げた。

その際、被つていた毛布がハラリと落ちて、露出している乳房がすっかり覗いてしまったが、ルルーシユが残していったキスマークは、とつくにコードが消してしまつていた。

シャワーを浴びたばかりだというのに、毛布のおかげで全身汗だくだった。

それさえ残つていなければ、なんだか悪い夢でも見た後のような、釈然としない不快感。

今のは本当に、ルルーシユだったのか？

あの男が、一体何を考えて、ちよつかいを出してきたのか知らないが。

何を考えているにせよ、単なる『共犯者』に過ぎない私まで、本来の目的以外に巻き込んでくれるな と、C・Cはうんざり気分です。溜息を吐きこぼす。

『でも、C・C？ 案外あなただって、悪い気はしてないんじゃないの？』

「ふざけるな。どうして私が……」

『いいじゃないの、少しくらい。付き合つてあげれば？』

「お断りだ。マオの二の舞だけは御免だから」

だから最初からルルーシユには、「私たちは共犯者だ」と宣言してあつたはずだ。

あの男も、C・C・Cを利用するための口実として、その要求を受け入れた。

それが今になって、こんな行動を取られてしまったては、正直言つて、C・C・Cには迷惑千万以外の何物でもない。

『けど、C・C・C？ 果たしてルルーシュに、あなたが殺せるかしら？ 今でも充分、情に吞まれてる感じもするけれど』

「殺せるさ。私はアイツの『共犯者』であり、もっとも卑劣な『懐<sup>ふたこ</sup>刀<sup>ろがたな</sup>』だ。信じさせておいて、私は最後の瞬間に、あの男を決定的に裏切る。あの男のプライドは、そうした種類の裏切りを容認できるほど、柔軟性に富んではない」

だから、殺せる。

自分自身のプライドを守り抜くために、ルルーシュは迷惑そうな顔さえして、平然とC・C・Cを殺して見せるだろう。

そう胸の内です断言すると、まったく信じてない様子のマリアンヌが、クツクツクツと嫌な感じに微笑んだ。

『相変わらず、素直じゃないのね？ 近い将来、裏切る運命にあるわけだから、愛情が絡む部分に関しては、ルルーシュの気持ちに裏切りたくない？ フフツ、どうせなら、さんざん弄んで、

紙くず同然に捨ててしまったほうが、よっぽど後腐れがなくて良いのよね。妙なところで潔癖症なんだから』

「うるさいぞ、マリアンヌ。魔女が自主的に、おまえの息子の純潔を守ってやっているんだ。仮にも母親なら、多少はそれらしく感謝の真似事ぐらいしてみろ」

『お断りよ。一方通行の愛情なんて、存在する価値がないもの。』

「まア、いいわ。せいぜい悪あがきに勤しんで頂戴。『ラグナレク<sup>神</sup>の接続』<sup>殺し</sup>までには、もうすこしばかり時間がかかりそうだから』

そう言つて、突然マリアンヌとの交信は途絶えた。

C・C・C自身、いまだに一体どういう仕組みで実現しているのかわからないが、いつだって勝手にマリアンヌのほうから声を掛けてきて、最後はマリアンヌの都合に合わせて勝手に切断されてしまうの

だ。

まったく、変なところで、よく似ている母子おやこだなと呆れながら、C・Cは、汗みずくになってしまった身体をスツキリさせるために、ふたたびシャワーを浴び直すことにした。

朝から いや、世間的には、とつくに昼の一時を回っているのだが ハードな経験を強いられてしまったものだから、ようやくひと心地ついた時には、猛烈にすきつ腹を抱えていた。

そういえば、昼前にシャワーを浴びに行く際に、偶然スザクと顔を合わせたので、「ついでに私の分も、ピザを注文しておいてくれ」と伝言を頼んでおいたはずだが。

どいつも、こいつも、肝心の時には役に立たない連中ばかりだなと苛立ちを感じていると、折りよく当人が部屋まで訪ねてきた。

「C・C、起きてる？ つと、ゴメン！」

「ん、どうした？」

「どうしたって……きみねえ」

ルルーシュの部屋で、こっそり同居しているのを知られてしまったのは、まだ最近の話である。

公式には『毒ガス』として、ブリタニア軍に追われる立場であった謎の少女。

そのブリタニア軍に所属していながら、スザクはC・Cの存在を黙認している。

C・Cが、ゼロとも関係のある人物であることを、知っているにもかかわらず だ。

コーネリア所属の一兵卒から、シュナイゼル所属の特派に移動になったことも影響しているのかも知れないが、C・Cを軍に引き渡せば、確実に実験動物として扱われる身の上を案じているせいでもあった。

それでいて、ゼロの正体がルルーシュであることには、一向に気づく気配もないのだから、この男の目にも、呆れるほどに大きな鱗がはまっているに違いない。

むしろスザクは、頭からルルーシユの無実を信じ切っているものだから、ルルーシユに気づかれぬようにそれとなく、C・Cの監視を行っているのだ。

唯一無二の『親友』である、『大切なルルーシユ』に、C・Cが余計な影響を与えないように心配する一心で。

まったく、こいつらの『親友ごっこ』も、傍目には呆れるほどに一方通行だな　と常日頃から皮肉に思っているC・Cは、ベッドの端に腰を下ろしたまま、何食わぬ顔つきで濡れた髪をタオルで拭う作業に専念した。

「気にするな。必要な部分は隠れている」

あんまりC・Cが堂々としているものだから、軍生活の長いスザクは、あっさり開き直すことにしたようだ。

さりげなく部屋の中まで入ってくると、音を立てずに背中ドアを閉ざした。

C・Cは、『馴れ馴れしい奴だな』と不快に感じたが、まもなく聞こえてきたのは、ナナリーと咲世子の話し声。

たしかに現状を目撃されてしまうと、説明するのに面倒くさいことになってしまっただろう。

決してスザクを信用しているわけではなかったが、いざとなったらショックイメージで撃退してやれる自信があるものだから、C・Cも気にせず淡々と作業を続けた。

考えてみれば、さっきのルルーシユも、遠慮なくショックイメージで撃退してやれば良かったのだ。

今の今まで、それを思いつかなかった自分に気づいてムツと顔を顰めると、八つ当たりのようにタオルで挟んだ濡れ髪を、パンパンと叩いて水気を拭っていく。

しばらくその様子を興味深そうに眺めていたスザクは、なにやら愉しげにクスリと息を洩らして微笑んだ。

「なんだ？」

C・Cは、視線を向ける必要すら感じずに、どうでも良さそう

に訊ね返した。

スザクは、まったく気にした様子も無い。

「いや、ずいぶん刺激的な眺めだと思つてさ。ひよっとして、ルル―シユの前でも、いつもそういう格好かい？」

そういう格好とはつまり、湯上りにバスタオル一枚でウロウロしているのか？ という質問だ。

C・Cは、溜息まじりに足を組み替えると、膝の上に頬杖を乗せさせた。

「アイツは駄目だな。女に興味が無いクセに、妙なところで口うるさいんだ」

「そうかな？ 最近は、随分いろいろ目覚めてる感じもするけどね」

「お、そうなのか？」

あの男、一人前にどこで色気づいてるんだ？ と思わず興味を覗かすと、やたらに爽やかな顔をして笑っているスザクが、腕組みしながら背中ドアに寄りかかった。

「その調子だと、今までルル―シユに襲われた経験つてない？」

「あるわけないだろう？」

そう断言してしまつてから、ふいに、さっきのシーンが脳裏をよぎつた。

アレも一応、襲われたうちに入るのだろうか？

その割りに、C・C自身がまったく危機感を味わってなかつたので、考えても今ひとつピンとこなかつた。

「なア、スザク？」

「なんだい、C・C.？」

髪を拭っていたタオルを、適当にそのへんに放逐すると、組んだ足をほどいて、C・Cはそのままぱったりベッドの上に転がった。「たとえば、おまえがルル―シユの立場だつたらどうする？ 四六時中、女とふたりきりで、同じ部屋で同居を続けられるか？」

わずかに目を見張つたスザクは、「その場合、相手はきみだと限定したほうが良いのかい？」と逆に訊ねる。

C・Cは、面倒くさかったので、そのまま頷いた。

「うん……出来なくはないと思うけど、身体が反応しちゃったら、さすがにちよっと自信がないかな？」

だって、きみたち一緒に寝てるんでしょ？ と苦笑まじりに訊ねられ。

そういえばルルーシュは、生理的な変化を今まで一度も露わにしたことがないなど、今更のように気づいた。

今さっきC・Cを押し倒している最中にさえ、身体の変化は皆無だったのである。

アイツは、本当に私のことを、『女』だと認識しているのか？

男女の関係がどうのと、一人前に口舌をぶっておきながら、アレスら単なる言葉遊びのようにしか思えない。

ますます、ルルーシュの考えていることが意味不明で。

ムシャクシャしながら身体を起こすと、腕組みしながら眉間に皺を刻んで、日頃は考えたこともない分野に関して頭を悩ませた。

気づかぬうちに、さりげなく歩み寄ってきたスザクが、「はい、コレ」と言つて、紙袋の中から何かを取り出した。

「待ってたのにさ、ルルーシュから伝言、伝わってない？」

差し出された品物を目にした瞬間に、怒りで我を忘れてしまったC・Cは、冷え切ったピザの箱を抱えてフルフルと肩を震わせた。

「……許さんツ……ルルーシュの奴ううツ！」

言ってみれば、このピザを万全の体制で美味しく味わうために、仮眠に勤んでいたのだ。

それなのに、ルルーシュがワケのわからぬ行動で振り回してくれるものだから、せつかくの華麗なる計画が台無しではないか。

この怒りは必ず三倍 いや、五倍以上にして返してやる！ とブルブル震えながら決意に燃えていた面前に、すっかり他人事の様子の子のスザクが、「はい、コレ」と言つて、コンビニの袋を差し出し

た。

条件反射で受け取ったC・Cは、中を開いて覗いた一瞬だけ怒りを忘れた。

「お、花火じゃないか？ 風流だな」

「うん、ピザのオマケ」

「へえ？ この不景気に」

「って口実なら、きみもルルーシュを誘いやすいんじゃないかと思っただけ」

たちまち怒りを思い出したC・Cは、遠慮なく半眼でスザクを睨め付けた。

「どうして私が、アイツを誘わなければいけないんだ？」

逆ならともかく。

考えてみれば、あの男は、理不尽な理由で女の寝込みを襲ったわけだから、相当気合の入った謝罪をする義務が生じているはずだ。

マリアンヌに言われるまでもなく、どう考えても最近の自分は、ルルーシュに対して甘すぎるんじゃないか？ と、眉間の皺を量産していると、その傍らでは、スザクが勝手に話を続けていた。

「ちよつと懐かしくってね。衝動買い？ でも買ったなら、それで満足しちゃってさ。興味ない？」

話を振られて、C・Cの考え事は、またちよつとわき道に反れた。

正直言っただけなら、大有りだったからだ。

マオと二人で中華連邦の山中で隠棲暮らしをしていた最中に、「欲しい」としつこくせがまれて、爆竹なら買い与えてやった記憶がある。

あちらの風習で、正月には必ず爆竹を派手に鳴らして、新年の到来を祝うのだ。

だが、単純に花火を愉しんだ経験は一度も無い。

そんなC・Cの内心を見透かしているような顔つきで、スザクが平然と話を続けた。

「本音を言ったらね、僕はこのまま、きみとルルーシュがくつついで、きみが黒の騎士団に構っている暇が無くなればいいのになア  
くらいのことなら、考えているんだよ、C・C・？」

やっぱり、そういう魂胆だったかと、いい加減C・Cもうんざりしてしまっ。

まったく、どいつも、こいつも。

いったい何が愉しくて、私とルルーシュをくつつけたがるのだからか？

「本当にしつこい男だな。前々から言ってるはずだろう？ 私はブリタニアのやり方が嫌いだ。正義の味方に与して何が悪い？」

よくもまあ言えたものだが、まさに『嘘も方便』である。

何度も聞かされている主張など、あっさり右から左に聞き流してしまつたスザクは、相変わらず頑迷な顔つきで、当然のように自説を押し付けてくる。

「個人の主義主張に関することだからね、『悪い』とまではハツキリ断言しないけど。それを言ったら、あいにく僕は、ゼロのやり方には反対なんだ。だから、出来れば、その陣営に協力している人間を、ルルーシュには近づけたくない」

「言っていることが、メチャクチャだろう？ だったら、どうして私と、ルルーシュをくつつける必要があるんだ？」

「だって、身元も知れない怪しい女の子を、『不憫だから』ってだけの理由で、無条件に匿っちゃうような男だよ？      ルルーシュ

だけにしてあげなよ？      ルルーシュなら、きつときみを幸せにしてくれる」

だから、黒の騎士団からは手を引け      スザクは暗にそう勧めているのだった。

何が一番タチが悪いと行って、同時にルルーシュの足首にも、『ナナリー以外』の足枷を嵌めたがっている魂胆だ。

もちろんルルーシュのことは信用しているが、なにしろこの男は、一番初めに『ブリタニアをぶっ壊すっ！』というルルーシュの決意

表明を聞いているのだ。

だからこそ、出来るだけ多くの保険をかけておきたい一心なのだろう。

C・Cは、「話にならないな」と、軽く鼻の先であしらった。

「所詮、私はブリタニアの実験動物だ。その私と、ルルーシュが、いったいどうすれば全うな関係を築けると思うんだ？ 仮に一時的な気の迷いで、ほだされるような結果に陥っても、おまえの言う『幸福』と、私のそれは断じて直結していない。ルルーシュにしても、また然りだ。悪いことは言わないから、さつさとあきらめろ」

過去に一度、ナリタで接触した時の経験から、スザクはC・Cを「ブリタニアの人体実験により、特殊な能力を与えられてしまった少女」と認識している。

そのほうが都合良かったので、C・Cもあえて訂正することなく、今まで曖昧に誤魔化していたわけだったが。

ルルーシュとはまた違った冷やかさを内面に隠し持っているスザクは、こうした際には、ひときわ際立つ冷徹な眼差しでC・Cを見下ろした。

「僕だって、きみみたいに、存在自体が爆弾みたいな相手より、ルルーシュには、もっと全うな『普通の女の子』を勧めてあげたい。

けどね、あいにく、きみを選びたがっているのは、僕じゃない。

ルルーシュだ」

冷やかな口調で吐き捨てるなり、C・Cの手元からピザの箱を奪い取ってしまつと、そのままゴミ箱に投入した。

「おいっ、おまえ！」

「いいじゃない、お腹空いてない？ 出かけようよ」

「どうして私が、おまえなんかとっ」

「おごるよ？」

給料日なんだよね、今日。

いろいろと積もる話も、あることだし？

一見して、人の良さそうな笑みを浮かべている瞳がニコリと微笑む。

それでも決して、瞳の奥では笑っていないのだ。

ルルーシュよりも、よっぽどコイツのほうが悪辣非道じゃないか

とC・Cは、うんざり気分で溜息まじりに天井を見上げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1994m/>

---

コードギアス 夏の風物詩

2010年10月10日11時20分発行